

評論シリーズ 二

婦人運動の実践題目

高群逸枝

目次

いかに恋愛すべきか	一
世の醜男醜女に与う	一一
恋愛と強権	三八
小ブル藤森成吉に与う	四四
お出でなされた	七九
婦人運動の実践題目	一二〇

いかに恋愛すべきか

——恋愛と尊敬——

一

「恋愛とは何ぞや」などとは、考えなくともよいではないか、というのが、わたしの恋愛観です。いいかえれば、恋愛というものは、自然発生的なものであるであって、またそれで十分だ、ということなのです。

二

その自然発生を、何のさまたげすらなしに、自由に、自然発生せしめよという、いわなくとも分っているようなことを、わたくしどもはいうが、そして、こういうことは、ほんとに面倒なことで、少しもいいたくないのだが、今日の世の中は、いわなくともいいような面倒なことを、たくさんいわねばならぬような仕組みになっている。

それというのが、つまり自由でないからだ。思うことを、そのまま行うことができないからだ。だから「自由な社会をめがけて進め」と、またしても、やっきとなって叫ぶ始末

だ。

三

自由な社会といっても、そのときになってみれば、そこにはまた不自由があり、それがその社会での問題になるだろう。わたくしどもは、こうしてあらゆる自由とか、もっとも新しいとかいうものを、次つぎと発見しては進んでいく。そしてそれは結局、静的実体論者のいうように、もっとも古いものを新しいと思ひ、静を動と主観するものであるかもしれない。

しかし、現実のままでは、やっていけないことが事実だとすればわたくしどもは、わたくしどもの主観し、客観しうる範囲における、もっとも自由なもの、もっとも新しいものにむかって進んでいかねばならない。

四

かくて、恋愛に対する認識にしても、一時代ごとにちがってくるのです。

封建時代の恋愛観は、一口にいって、「恋愛罪悪観」だった。恋愛は罪悪だ。醜いものだ。汚らしいものだというのだ。宗教というものが封建時代に必要のように、こうした恋愛観もまた、封建時代には必要だった。

くだって、ブルジョア社会——いいかえれば自由民権社会の恋愛観は、エレン・ケイが代表している、いわゆる「恋愛の自由」で、「結婚制度の改良」という目標が、この恋愛

観によって樹立されたのである。

だが、今や、わたくしどもは、それに飽き足らないようになってきた。わたくしどもの恋愛観は、ブルジョア恋愛の「自由」にくらべると、もっと生理的な意味のもの、すなわち「恋愛の自由」というよりも、「恋愛の自然」というべきものであって、このわたくしどもの恋愛観は、「結婚制度の改良」でなく、「結婚制度の廃止」をめがけている。

五

しかし、今日は過渡期であって、エレン・ケイの「恋愛の自由」から、わたくしどもの「恋愛の自由」へ移る途中にある。

今日の世の中は、アメリカイズムの支配のもとにあると、室伏高信氏がいっておられるが、恋愛においても、まったくそうといえる。

アメリカの何とやという女学生が一九一九年に、ボストンという町の、古びた出版屋から本を出した。その書物は、ごく目だたないものでしたが、それにもかかわらず、多くの共鳴者があった。「恋愛というものは、仕事の疲れをいやすために存在する」というのが、その内容なのでした。

こういうコマシヤクした恋愛観、巧利的な恋愛観は、すべてアメリカが生んだものらしい。ブルジョアジーの国、唯物万能主義の国の娘どもでなくては、ちよつといえないことですな。

が、それからというもの、世界中の娘ども、中婆さんどもの間に、この思想がなかなかはやった。現に、わたくしどもの日本ですら、こういう恋愛観は、ちょっとモダンに思われる。

六

これもアメリカの何とかいう女優は、恋愛の自由はすでに古い。母性の自由こそ主張されねばならないといったが、それがなかなか振っている。彼女は、「学者と飛行家の子供をつくって見せる」という宣言をして、さすがのヤンキーたちを驚かせた。ところが最近、「学者と接して望みどおり妊娠したから、この次は飛行家に接して、飛行家の子供を妊娠して見せる」という声明書を発し、再びアッといわせたということだ。

仕事の疲れをいやすためにだの、学者と飛行家の子供をつくってみせるためにだのと、転んでもただでは起きない「ために」というものがついてまわる。

コロンタイという人の恋愛観が、一時さわがれましたが、彼女もまた、「仕事の能率をあげるために、恋愛は必要である」といい、「子供が生れるといっても嘆くにはあたらない。それでもって、模範的な育児法を発見するための、あるいはまた育児所を経営するための機縁とすることができる」といった。

母は涙かわくまなく

祈ると知らずや

などという古風な母性愛は、時代おくれだというわけだ。

七

しかし、こうした自我中心の考え方は、いま始まったことではない。「恋愛はひまつぶしのために存在する」と考えた階級が、この世の中に出てきてからのことで、それがいま黄金万能のアメリカにおいて、はつきりとその正体を現わしたというわけなのです。

万人が労働者だったと想像される社会、そういう社会に住んでいたであろう人々は、「何のために恋愛するか」などとは考えてもみず、異性にあれば異性が恋しかったものだから恋し、恋した結果子どもができたというような、ごく自然なやりかたであった。

そして、そういうやりかたの時代が、結果においては、いちばん優生学的だったと学者たちがいつている。プラトーンの対話篇の中の医者は、「医者というものは科学の奴隷でなく、自然の使徒であるときにのみ名医でありうる」といつていますが、初めに定義や公式があつて、しかる後に恋愛があるなどというやりかたは、まったく名恋愛でなく、蔽恋愛たるをまぬがれない。こういう蔽恋愛は労働者の社会のものでなく、巧利主義、営利主義、搾取主義の社会のものです。

八

恋愛は金銭に支配されるということを、何か新しい意義のあるもののようにいう人があつた。(十二月号の婦人公論を見よ) この考えは唯物史観からでもきているらしくみえる。

なるほど金銭からも、権力からも、暴力からも支配される場合があり、従来は多くはそうでありました。

封建時代の政略結婚は、恋愛をまったく権力の支配下においたものであった。ブルジョア時代は金の中だから、今日の恋愛は金から支配される場合が多いでしょう。

だが、そうかといって、権力に支配され、金に支配されるのが、恋愛の本質でないのみか、断然そういうものの支配を拒否するところに恋愛の本質はある。

権力や金から超越している恋愛を尊しとしたのは、決して詩人のセンチメンタルでなく、恋愛が自己の本質を曲げずして主張したものであって、遠い将来の理想的社会、権力にも金にも支配されることなく、恋愛がその自らの自然性を、自由に発揮することのできる社会を、強く求めている証拠がそれだ。

九

生存と生殖の自由が、万人的に解決されねばならない。解決されるまでは、それらの生存の自由も、生殖の自由も、「自由をノ 自由をノ」と叫びながら、ひるまず、妥協せず、己れの本質を表示しつづけるでありましょう。妥協したものを卑しとし、妥協しないものを尊しとすることに、少しのまちがいない。

十

かくて恋愛は、その自由を主張し、束縛を拒否します。今日でも、ほとんど全ての恋愛

ボーイやガール達ですら、恋愛に結婚のともなうことを嫌っている。それは恋愛が、恋愛以外の他のものから束縛されることをいやがるからである。

今日の娘のほとんどすべては、結婚地獄を予想していますし、結婚制度の無意義なことを知っています。

実際、結婚制度というものは、憎まれものでありまして、仲のわるい夫婦は、制度に対する不満を切実に感じているし、仲のよい夫婦は、制度などはあっても無くても同じことだと考えています。

一一

何よりわるいことは、この制度は、制度的道徳、すなわち一夫一婦的な道徳へ、自発的にせよ、他発的にせよ、ともあれ無理矢理におしゆがめ、押し込もうとする。

もし恋愛が、自由人の交渉なら、所有し所有されることを主張したり、確かめたりする形式や、それに伴う道徳は、明らかに不必要である。

そして、こうした男女関係のみが、創造的であり、新鮮である。創造は自由の上にきづかれるし、全は無と共である。捨てることは得ることだ。

一二

近頃の家庭争議は、知的なものであればあるほど痛ましい。しかし、それは、進歩的であり、自覚的であることを表示するものであって、「その前夜」における、意義ある闘いで

あるといわねばならない。

それであるのに、恋愛結婚は破綻しやすいなどといって、非恋愛結婚を堅実なものと考えられるものがあるが、破綻しないものが堅実か、破綻するものが堅実か、どうかというところ、わたしは多くの場合、破綻しない家庭というものの内実の醜さも、退屈さ、無自覚さ、冷淡さを知るものであって、破綻するところに、より多くの進歩、自覚、勇気等の堅実性を発見する。

一三

非常な努力によって仲をよくしているような夫婦を見ることは苦しい。仲のよい夫婦、絶対的な夫婦というものは、結婚を超越した意味における、ごく自然的な、だからすべての男女関係の極致であるに違いないし、もはやそれは、動を絶した静、完成、終結等を意味しており、その意味において羨やましく見えることもあるでしょうが、しかし、どんなに羨ましくても、そういう境地にはなかなか達しられないことが多い。

そういう夫婦は、確信と、尊敬によって、つながり合っており、その関係は透明で、少しの邪念すらない。すなわち夫婦ともに、執着なき自由さと正しい尊敬の持ち主である場合か、あるいはまた、「半身が半身をもとめ得た」という言葉の意味に合致する場合かでありましょう。

一四

家庭が破綻する場合、醜い愛想づかしや、悪口などをいい合うものがあるが、あの態度はほめられない。ああいう態度の持ち主は、新しい恋愛に進み入る資格を欠く。ブルジョア恋愛は、「自我の主張」によって成り立つものであるが、新しい恋愛は、相互扶助の精神、相互尊敬の精神によって結ばれ合うものだ。

それであるから、どんな場合にも、相手を責めるということとは考えられない。もし夫なり妻なりが、普通のような意味で不品行？ であるならば、それはその相手の妻なり夫なりに満足しないからで、従って満足されておらぬものが、満足せよと主張するなどということは、あつかましいことだと悟らねばならない。その他のことにしても、責めるまえに「責めるために存在している自分」というものの滑稽な立場を思ってみるがよい。

原阿佐緒さんの書かれたものを読んだが、あの人の、ああも人を追求し、絡みついてゆかれる態度が、あの人を不仕合わせにするものではないかと思われた。

夫が隠しだてをするならするでよい。彼とても好きでしているわけではあるまい。だから、その意味において、彼とても十分不幸だ。追求せずに、そっとしておくがよい。それが愛であり、また結果としては、勝利ともなるであろう。

新しい恋愛は、独立的な精神と、尊敬にもとづいていなくてはならない。そこに男女関係のほかからかさと、ほんとうの愛の獲得とがある。

ある夫に別れた婦人が、「わたしは彼を信頼していたが裏切られた」といっているのを

聞くことはいやだ。それより、

「彼はああ行くべきでしたわ」

「といってほしいのだ。」